通言語的なヴォイスの意味変化と統語構造

Cross-linguistic Semantic Changes and Syntax of Voice

若　芝　　青 *

Jo WAKASHIBA

1．Introduction[1]

本研究では、ヨーロッパ言語における Voice syncretism（Alexiadou et al.（2015），Oikonomou & Alexiadou（2022），Sabb（2020），Schäfer（2017），i.a.）と呼ばれる現象に注目しその言語間変異と意味変化に統語的な説明を与えることを試みる。

Voice syncretism とは、ある 1 つの形式に対して複数のヴォイスにかかわる意味が対応する現象である。ヨーロッパ諸言語において、再帰代名詞を含む構文が様々な意味を表すことが知られている。例えば、スペイン語においては、再帰形の se はもともと再帰代名詞だったが、用法が拡張して様々な意味を表すようになった（Haspelmath（1993），López（2002），Monge（2002），志波（2020））。（1）にその一例を挙げる（それぞれの構文の特徴は 2 節に示す）。

（1）a. 再帰（reflexive）：Juan **se** ama（a sí mismo）.
Juan SE loves　ACC self same
‘Juan loves himself’
（志波（2020））

b. 固有（inherent）：José **se** despertó.
José SE woke up
‘José woke up’
（志波（2020））

c. 反使役（anticausative）：El vaso **se**　rompió.
the glass SE broke
‘The glass broke’
（志波（2020））

d. 受身（passive）：**Se** comieron　　todas las paellas anoche.
SE eat-Past-3rd-Pl. all　　the paella-Pl. yesterday
‘All the paellas were eaten yesterday’

---

[1] 本稿の作成に当たって、藤本滋之先生と前田雅子先生より貴重な助言をいただいた。ここに感謝を記す。

* わかしば　じょう　文学研究科英文学専攻博士前期課程
指導教員：藤本　滋之

e. 非人称（impersonal）：En autobús **se** tarda unas tres horas.
in bus SE take-Pres-3rd-sing. three hours
'It takes three hours by bus'

また、これらの変化は、通言語的に見ても（2）に示すような方向に変化していったことが知られており、再帰代名詞を含む構文がどこまでの意味をカバーするのかについて言語間で違いがある（Alexiadou et al.（2015），Haspelmath（1993，2003），Monge（2002），志波（2020））。再帰形は、英語では再帰構文と固有の意味（と強調用法）のみに出現するが、ドイツ語では反使役の意味まで、フランス語では受身の意味まで、さらにスペイン語やイタリア語では非人称の意味にまで拡張している。

（2）再帰　>　固有　>　反使役　>　受身　>　非人称

これら諸構文がそれぞれどのような過程を経て発展を遂げたのかについては、主に意味的な観点からの説明を中心に多くの研究者が取り組んできたが未だに見解の一致を得るに至っていない。また、再帰形を用いた構文それぞれの研究の多さに対して（Haspelmath（1993），López（2002），Monge（2002），志波（2020），etc.）、（2）のような変化が統語上でどのように説明されるのかについてはあまり研究が進んでおらず統一的な見解はないように思われる（e.g. MacDonald and Maddox（2017））。本研究では、主にスペイン語、ドイツ語、英語を中心として、上記のような再帰形における voice syncretism と言語間変異、意味変化に統語的な説明を与えることを試みる。以下では、再帰形を表すのに代表して SE を用いることとし、これはスペイン語、フランス語の se、イタリア語の si、ドイツ語の sich、英語の self 形を含むものとする。

提案としては、上記のような変化は、再帰代名詞が自立的な意味を失うにつれて起こった現象であると考える（Fagan（1992），Kemmer（1993），Schäfer（2008），Steinbach（2002）etc.）。また、再帰代名詞を用いる構文が単一の統語構造を持っているのではなく、それぞれの機能に対応した複数の統語構造があると考える立場をとる。

２節では再帰形の意味拡張と言語間の変異について見る。３節では、主に焦点を当てるスペイン語、ドイツ語、英語の再帰形を用いた構文を概観する。４節では、代名詞の文法化をもとに、この文法化の段階が再帰形の意味変化と連動していることを主張する。また、５節では、上記の意味変化に統語的な説明を与えることを試みる。６節はまとめである。

２．再帰形を用いた構文の意味変化と言語間変異

ヨーロッパ諸言語において、再帰代名詞として使用される形態素を用いた構文が様々な意味を表すことが知られている。また、これらの意味は初めからすべて存在したわけではなく、再帰代名詞が元々表す再帰的な意味から徐々に拡張されてきたものと考えられている（cf. 志波（2020））。本研究では、以下のような意味変化を採用することにする。

（3）再帰（reflexive）>固有（inherent）>反使役（anticausative）>受身（passive）>非人称（impersonal）

Haspelmath（1993，2003）、志波（2020）をはじめ、このパラダイムの中に中間構文（Middle）を入れる研究も多い（Anticausative > <u>Middle</u> > Passive）。しかし、意味拡張を考えるうえで、Haspelmath（1993）たちが正しいなら、SE が Passive の意味を持つことは Middle の意味を表すことを含意するが、デンマーク語の SE には Middle の意味が存在しない（Bergeton（2004））。以上の理由から、意味変化の方向として

（3）を採用して議論を進めることにする（cf. de Schepper (2007)）。

さらに、以下（4）にみられるように、意味拡張の範囲は言語間で違いが観察されている。例えば英語では、再帰形を用いた構文は再帰の意味と固有の意味までしか表すことができない。ドイツ語では、反使役の意味までを表すことができる。また、同じロマンス諸語でも、フランス語では受身の意味までしか持ちえないが、スペイン語やイタリア語では非人称の意味にまで意味の拡張が進んでいる。

（4）

	Reflexive	Inherent	Anticausative	Passive	Impersonal
Latin	✓	(✓)			
English	✓	✓			
German	✓	✓	✓		
French	✓	✓	✓	✓	
Spanish/Italian	✓	✓	✓	✓	✓

本研究では、特にスペイン語、ドイツ語、英語の３つに研究対象の言語を絞ることにする。その前に、上で見たヴォイスの意味をもつ再帰形を用いた構文の実例をそれぞれ概観するため、３節で各構文の特徴を観察する。

３．各言語の再帰代名詞を用いた構文

本節では、再帰形を用いた構文が表す様々な意味（再帰、固有、反使役、受身、非人称）を表す例を概観する。それぞれの構文が示す統語的、意味的な特徴を見ていく。

3.1.　再帰（reflexive）

典型的な再帰の意味を表す構文であり、通常の他動詞文と同じく（5）のような構造を持つと考えられる。また、再帰代名詞はそれ自体が主語とは別の意味役割をもらう照応形であり、項として内項に基底生成される要素である。外項の DP が内項を c 統御することにより、内項に生起する SE は束縛変項として機能し、束縛条件（A）に従う照応形である。

（5）$[_{\text{VoiceP}}\ \text{DP}_{<\text{Agent}>}\ \text{Voice}\ [_{\text{vP}}\ \text{v}\ \text{SE}_{<\text{Patient/Theme}>}]]$

（6）a. Juan **se** ama (a sí mismo)　(Spanish)
Juan SE loves ACC self same
'Juan loves himself'
b. José **se** mira (a sí mismo) en el espejo.
José SE looks ACC self same in the mirror
'José looks at himself in the mirror'
（志波（2020））

（7）a. Er lobt sich.　(German)
He praises SE
'He praises himself'
b. Hans bewundert sich.
Hans respects SE
'Hans respects himself'

（de Schepper（2007））

（8）a. John washed himself. （English）
　　b. Mary likes herself.

共時的な観点からの分析として、すべての SE を統一的に項の削減（argument reduction）を表す自動詞性（intransitivity）のマーカーであるとする分析（e.g. Reinhart and Siloni（2005））もあるが、通時的な観点も考慮すると、４節で示すように典型的な再帰を表す構文では SE 自体が意味役割をもらう強代名詞であることを説明しきれない。

また、3.2. 節で見るような固有の意味を持つものとは異なり、典型的な再帰を表す場合は動詞が SE 以外の内項を自由に取るため、比較的生産的である。

3.2.　固有（inherent）

この構文は、Haspelmath（1993，2003）の分類では、身体移動・身づくろいに該当するものである。伝統文法では、内在的再帰（intrinsic reflexivization）、代名動詞（pronominal verbs）、疑似再帰（pseudo-reflexive）などと呼ばれるものだが、本稿では統一して「固有（inherent）」な意味と呼ぶことにする。

（9）a. Maria **se** accostó. （Spanish）
　　Maria SE lay down
　　‘Maria lay down.’
　　b. José **se** despertó.
　　‘Jose woke up’

（志波（2020））

（10）a. Max irrt　**sich**. （German）
　　Max errors SE
　　‘Max makes a mistake.’
　　b. Max setzt **sich**.
　　Max sits　SE
　　‘Max sits down.’

（de Schepper（2007））

従来のヴォイスの意味変化を見る研究では、3.1. 節で見たような典型的再帰構文から3.3. 節で見る反使役の意味に直接拡張させる研究が多い。しかし、Haspelmath（1993，2003）や志波（2020）などに見られる記述では、その２つの間に身づくろいや身体移動といった、本稿における固有の意味が介在する。まず、3.1. 節の典型的再帰構文と固有の意味を持つ再帰構文との違いを見よう。

まず、この構文の特徴として、述語動詞と SE の組み合わせで特殊な固定された意味を表し、内項には SE 以外を取りにくいため、典型的な再帰構文に比べて生産的ではないことが挙げられる。また、固有の意味をもつ SE は、主語がもらう意味役割を共有する（Steinbach（1998，2002）という分析や、固有の意味を表す SE は単なる照応形とは異なる振る舞いをすることが観察されている研究もある。

さらに、Dobrovie-Sornin（1998）をはじめ、以下3.3. 節で見る反使役と同じグループ分けをされることがあるが、意味役割を見てみると固有の意味を持つ構文では身づくろいや身体移動をする名詞句として主語に <Agent> や <Experiencer> が出現するのに対し、反使役では <Agent> が現れないという点で２つは異なる。ここから、固有の意味を表す再帰構文は非能格動詞のような振る舞いを見せることが分かる。

また、英語では再帰代名詞とその強意形とが同型であることや self 形が形態的に複合的であることに連動して、再帰形が意味拡張をせず、典型的な再帰用法（3.1. 節）しかないとする分析が主流派だが（Haspelmath（1993），Kemmer（1993），König and Siemund（2000），i.a.）、以下（11）のようなデータが見られることからも、英語の再帰構文が持つ意味範囲について、より詳しい分析が必要である（Geniušienė（1987），Quirk et al.（1985），Siemund（2010，2014））。（11）の動詞群では、例えば（12a）のように、再帰代名詞が目的語として出現しなければならない。また、（12b）のように、再帰代名詞以外の目的語を取ることができない。ここでは、英語の再帰構文も固有の意味までは表し得るものとして考える。

（11）absent oneself, content oneself, ingratiate oneself, perjure oneself, pride oneself, etc.
（12）a. John absented *（himself）from the meeting.
b. John absented himself/*himself and his colleague/*his colleague from the meeting.
（Siemund（2014））

以上のことから、本稿では、固有の意味の再帰形を用いた構文は、典型的な再帰を表す構文とも反使役を表す構文とも異なるグループに属するものとして考えることにする。

3.3.　反使役（anticausative）

次に見るのは、反使役の意味を持つ、自発を表す再帰構文である。以下（13）、（14）に例を挙げる。

（13）a. La Puerta se abrió.（Spanish）
the door opened
b. El vaso se rompió.
the vase broke
（志波（2020））

（14）a. Die Tür öffnet sich.（German）
the door opens SE
b. Das Glas füllt sich.
the glass fills SE
（大矢（2008））

この反使役の意味を持つ再帰構文は、3.1. 節で見た典型的な再帰を表す構文とは意味的に異なる。具体的には、他動詞文は典型的な再帰構文を意味的に含意しないが、対して他動詞文は反使役を表す再帰構文を意味的に含意する。

また、言語間変異として次のような観察がある。英語の場合は反使役文においては（15）のように再帰形は現れないため、反使役までの意味拡張はないと言える。また、ドイツ語では、（14）のように動作主が含意されやすい自動詞は再帰代名詞 sich を用いて反使役を表すのに対し、（16）のように動作主の介入がない自動詞は再帰代名詞を用いず、英語のように自動詞のみで反使役を表す。

（15）a. The door opened.
b. The vase broke.
（16）a. Die Vase zebrach.
the vase broke

b. Die Schokolade schmilzt.
the chocolate　melts

（Schäfer（2008））

同じ反使役でもドイツ語では、動作主性／他動詞性が高い場合に再帰代名詞を用いた構文が用いられることがわかる（Schäfer (2008)，Alexiadou et al. (2006，2015)，and references therein)。本稿では、再帰形の出てくる構文における意味拡張を対象としているため、ドイツ語や英語における再帰形の表れない反使役文は対象外とする。

3.4.　受身（passive）

再帰代名詞を用いる構文の中でも、多くの研究があるのがこの受身の意味を表す構文である。例としては、(17) のようなものがある。

(17) a. **Se** comieron todas las paellas anoche. (Spanish)
SE eat-Past-3rd-Pl. all the paellas yesterday
'All the paellas were eaten yesterday'
b. **Se** rompieron las ventanas violentamente.
SE break-Past-3rd-Pl. the windows violently
'The windows were broken violently'

受身を表す再帰構文には、これまで通常の受身文との平行性から、受動文に対する分析と同様に分析がなされてきた。まず、受身を表す再帰構文と受動文に共通する特徴として、動作主の存在を見てみよう。2.3. 節で見た反使役の意味を持つ構文とは違い、受身を表す再帰構文では、目的を表す節 (purpose clause) や動作主指向副詞が容認可能となる。したがって、反使役にはなかった非顕在的な動作主が存在していることがわかる（Alexiadou et al. (2015)）。

(18) El bosque **se** quemó　　a propósito para construir chalets.
the forest SE burn-Past-3rd-Sing. on purpose to　　construct houses
'The forest was burned on purpose to construct houses'

（de Miguel（2015））

次に、受身を表す再帰構文と通常の受身文との違いを見てみよう。通常の受身文とは異なり、スペイン語やフランス語の受身を表す再帰構文では、動作主が by 句として顕在的に出現することは基本的には許されない。

(19) Se abrió　　la puerta（*por Juan）.
SE open-Past-3rd-Sing. the door by Juan
'The door was opened (*by Juan).'

言語間変異の観点からは、ロマンス諸語では再帰構文が受身の意味を表し得る。記述的には、スペイン語をはじめロマンス諸語では SE が接語・接辞化しており、これに連動して動詞が自動詞化されることにより受身の意味を持ちうるようになっていると考えられている。対して、再帰形が接語、接辞化していな

いドイツ語や英語では、再帰構文が受身の意味を持つことはない。

3.5.　非人称（impersonal）

イタリア語やスペイン語では、上記の受身の意味からさらに拡張して、再帰構文が非人称の意味も表すことができる。英語なら one、フランス語では on ‘one’ にあたる一般的な人について総称的に述べる意味を表す。スペイン語では、SE と動詞の 3 人称単数形を用いて非人称の意味を出す。同じロマンス諸語でもフランス語ではここまでの意味拡張が見られない。

(20) a. En autobús **se** tarda　　unas tres horas.　　(Spanish)
in bus　SE take-Pres-3rd-sing. three hours
‘It takes three hours by bus.’
b. **Se** dice　　que en España **se** come　　muy bien.
SE say-Pres-3rd-sing. that in Spain SE eat-Pres-3rd-sing. very much
‘It is said that food is very good in Spain’

Holmberg（2005，2010）は、各言語で非人称の意味を SE が表し得るかどうかについて空主語パラメター（Null Subject Parameter）の観点から記述を試みている。空主語言語ではない英語やフランス語のような言語では、それぞれ one や on のような顕在的な総称代名詞を使って非人称の意味を表す。対して、空主語言語であるスペイン語やイタリア語などの言語では顕在的な形態素である SE を用いて非人称の意味を表す。このような観点から、総称や非人称の意味を表す方法の違いが T 主要部の EPP 素性に還元できるとする研究もある（Mendikoetxea (2008)）。

以上、3 節では、ヴォイスの意味をもつ再帰形を用いた構文の実例をそれぞれ概観するために、各構文の特徴を観察した。

4．代名詞の文法化と再帰形の表す意味変化の関連性

本節では、代名詞の文法化と再帰形を持つ構文が表す意味変化が連動していることを見る。代名詞的要素は以下のような文法化をたどることが知られている（Bresnan (1998)，de Schepper (2007)）。

(21) 強代名詞（strong pronoun）＞弱代名詞（weak pronoun）＞接語（clitic）＞接辞（affix）

代名詞の最初の段階は、強代名詞（strong pronoun）である。この段階では、代名詞は他の名詞類と同じような振舞いを見せる。例えば、指示対象や意味役割を持つことができる。さらに、文頭に移動でき、等位接続をすることも可能である。次の段階は、弱代名詞（weak pronoun）である。この段階では、代名詞は強勢を受けず、文頭に移動したり等位接続をしたりすることができなくなる。さらに、clitic の段階になると、動詞に付くことができるようになる。最後に接辞の段階となると、自律性を完全に失って動詞の屈折の一部となる。

では、このような代名詞類の文法化と 2 節で見たような意味変化はどのように対応するのだろうか。まず、強代名詞は再帰の意味しか表すことができない。例えばドイツ語において、再帰の意味を持つ sich は強代名詞である。次に、弱代名詞になると再帰の意味だけでなく固有の意味や反使役の意味を持ちうるようになる。純粋な再帰代名詞としての再帰構文とそれ以外の意味を持つ再帰形を用いた構文では、代名詞の振舞いの違いが観察される。

（22）典型的再帰を表す再帰構文以外に出現する再帰代名詞の特徴（大矢（2008），i.a.）

① 文頭に立たない

a. **Sich** wäscht das Kind.
SE　washes the child

b. ***Sich** öffnet dir Tür.
SE opens the door

② 対比焦点を担えない

a. Das Kind wäscht **SICH**,（nicht seine Schwester）.
the child washes SE　　not　his　sister

b. *Die Tür öffnet **SICH**.
the door opens SE

③ 他の名詞句と等位接続できない

a. Das Kind wäscht **sich** und seine Schwester.
the child washes SE　and his　sister

b. *Die Tür öffnet **sich** und das Fenster.
the door opens SE and the window

（大矢（2008））

（22）のそれぞれの対比は、次のように説明される。典型的再帰を表す再帰構文以外に出現する再帰代名詞は、自立的な意味を持っていない。ドイツ語の文頭位置は通常トピック位置であるため（e.g. Haider（2010），Samo（2018））、自立的な意味を持たない要素は現れることができない。また、自立的な意味を持たない要素は焦点を担うことができず、他の名詞句と等位接続することができない。

さらに、clitic の段階になると受身の意味を持ちうるようになる。ドイツ語の sich は clitic にまでは文法化が進んでいない。２節で見たようにドイツ語の sich は受身の意味を持たない。また、ロシア語やデンマーク語では、代名詞の形から接辞まで SE の文法化が進んでいるが、接辞の SE のみが受身の意味を表し得る（cf. Haspelmath（1993，2003））。これらの事実は、clitic への文法化と SE が受身の意味を表し得るかどうかが連動していることを示している。以上のことを（23）に表として示す（cf. de Schepper（2007））。

（23）

	Reflexive	Inherent	Anticausative	Passive	Impersonal
strong pronoun	✓				
weak pronoun	✓	✓	✓		
clitic	✓	✓	✓	✓	✓
affix	✓	✓	✓	✓	✓

以上、４節では、（23）のように代名詞と再帰形を用いた構文の表す意味変化が連動しているということを見た。もちろん、共時的に見てみると、例えばスペイン語では clitic の段階まで再帰代名詞 SE の文法化が進んでおり、SE を使った構文は典型的な再帰の意味から非人称の意味まで表すことができるため、代名詞の文法化と構文の意味とが一対一対応にならず、上で見たような連動性が見えづらくなっている。この点に関しては、歴史的な変化の記述を詳しく追う必要があるが、本稿では一旦置いておくことにして議論を進める。次の５節では、２節から４節までで見た変化が統語上でどのように説明されるのかについて、提案を試みる。

5．再帰形を用いた構文の意味変化と統語構造

本節では、２節から４節で見たような通時的な意味拡張と言語間変異に統語的観点から説明を与えることを試みる。提案としては、上記のような変化は、再帰代名詞が自律的な意味を失うにつれて起こった現象であると考える（Fagan (1992)，Kemmer (1993)，Schäfer (2008)，Steinbach (2002) etc.)。再帰代名詞は、最初は強代名詞としてそれ自体が意味役割をもらう要素であったが、文法化が進むにつれて意味役割をもらわない虚辞的な要素として現れるようになったと主張する。

5.1.　典型的再帰の意味から固有の意味への変化

再帰構文の意味変化について、各段階の変化を具体的に見ていこう。まず、再帰の意味から固有の意味への変化だが、これは純粋な再帰代名詞としての SE (24a) が、動詞との idiomatic な関係性を作るために動詞と密接な関係を持つようになり、V 主要部へと編入されている過程であると考える（24b)。この時点の SE は弱代名詞として出現することが可能となっており、動詞と結びつきやすくなったものと思われる。もともと再帰代名詞は意味役割を独自にもらう要素であったが、この変化により再帰形 SE は意味役割を独自にもらう要素ではなくなったと考える。このような動詞に再帰形 SE が編入した構造に、イディオム的な特定の決まった意味が与えられる（cf. Embick (2015)，Embick and Marantz (2008))。

（24）a. Reflexive: $[_{\text{VoiceP}}\ \text{DP}_{<\text{Agent}>}\ \text{Voice}\ [_{\text{VP}}\ \text{V}\ \textbf{SE}_{<\text{Patient/Theme}>}]]$
　　b. Inherent: $[_{\text{VoiceP}}\ \text{DP}_{<\text{Agent}>}\ \text{Voice}\ [_{\text{VP}}\ \text{V-}\textbf{SE}]]$

5.2.　固有の意味から反使役の意味への変化

次に、固有の意味から反使役の意味への変化だが、これは（25）のように、SE が主要部移動して Voice 主要部となったことから起こると考える。Voice 主要部として SE が実現するようになったことで、内項位置のスロットが開き、V は補部に新たな項を導入することができるようになり、この内項は < 主題（Theme）> の意味役割をもつ。また、SE は主要部位置に併合されると、この Voice 主要部は外項に θ 役割を与えることができなくなると考える。SE は Voice 主要部を占めることにより、外項の θ 役割を持たない Voice 主要部となり、全体として自動詞的な反使役の意味をもたらす。

（25）a. Inherent:　$[_{\text{VoiceP}}\ \text{DP}_{<\text{Agent}>}\ \text{Voice}\ \ [_{\text{VP}}\ \text{V-}\textbf{SE}]]$
　　b. Anticausative: $[_{\text{VoiceP}}\ \ \ \ \ \ \ \text{Voice-}\textbf{SE}\ [_{\text{VP}}\ \text{V}\ \text{DP}_{<\text{Theme}>}]]$

この反使役を表す SE は θ 役割を独自にはもらわない要素である。というのも、この Voice 主要部を占める SE は先行詞によって c 統御されておらず、意味的に束縛されることがない。その結果として、この SE は θ 役割をもらうことができず、意味的に虚辞として解釈されることになる（Schäfer (2008，2017))。

ロマンス諸語とは違い、ドイツ語においては、SE にあたる再帰形の sich は接辞化していない要素である。したがってドイツ語については、sich は Spec, VoiceP を占め、動作主の θ 役割を担う外項の生起を阻止する虚辞的な要素であると考える。再帰形 sich が動作主の生起を直接的に阻止する要素であるとする分析は、ロマンス諸語やドイツ語を対象とした多くの研究でなされている（e.g. Labelle and Doron (2010)，大矢（2008)，Schäfer (2008)，i.a.)。

反使役の意味を持つ再帰構文では、先行詞から c 統御されない SE は虚辞的な要素であると解釈される。反使役の意味を持つ再帰構文のデフォルト語順が (26b) であるとする根拠を挙げた研究に Schäfer (2008) がある。ドイツ語においては、裸複数名詞（bare plural nouns）が語順によって異なる解釈となることが知

られている（Schäfer (2008)）。例えば、(26a) の Primaballerinas（主役バレリーナ）は、「マックスが称賛する主役バレリーナが何人か存在する」という存在（existential）の解釈と、「マックスは主役バレリーナというものを称賛する」という総称的な（generic）解釈の 2 つをもつ。それに対し、(26b) では、Primaballerinas（主役バレリーナ）が主語の前にスクランブリングされており、この場合は総称的な解釈のみに限定されてしまう。

(26) a. dass ja Max Primaballerinas bewundert（existential / generic）
that MP Max prima-ballerinas admires
b. dass ja Primaballerinas Max bewundert（*existential / generic）
that MP prima-ballerinas Max admires

(Haider and Rosengren (2003))

この観察を Schäfer (2008) は反使役文にも応用し、その基本語順と動作主が再帰形 sich により直接的に動作主の抑制にかかわっていることを主張した。Schäfer によれば、(27a) の裸複数名詞 Türen「ドア」は「開くという状態に変わるドアがいくつか存在する」という存在の解釈と「ドアというものは開くものだ」という総称の解釈の2つをもつが、(27b) では後者の総称の意味に限定されてしまう。このことは、(27a) が (26a) に対応する基本語順を持った文であり、(27b) は (26b) と同じく裸複数名詞がスクランブリングを受けて移動していることを示している。したがって、反使役文の基本語順は、(28) のように sich が内項よりも高い位置にあるということになる。この位置は、動詞の主語位置、すなわち動作主が生起する位置である。

(27) a. weil sich Türen öffnen（exisitential / generic）
because SE doors open
b. weil Türen sich öffnen（*existential / generic）
because doors SE open

(Schäfer (2008))

(28) [VoiceP sich [VP Türen öffnen]]

(Alexiadou et al. (2015), Schäfer (2008))

さらに、内項の格について考えてみよう。非対格の意味を持つ再帰構文における内項 DP は、主格として標示される。以下はスペイン語の再帰構文が反使役を表す場合の統語構造である。

(29) $[_{TP}$ T $[_{VoiceP}$ VoiceP-**SE** $[_{VP}$ V $DP_{<Nom.>}]]$

(28) のような構造に T が併合すると (29)、[uϕ] をもつ T は目標子となる [iϕ] を探索し、内項 DP を見つけて一致を結び、その結果として内項 DP は主格をもらう。

以上、5.2. 節では反使役の意味までの変化を見た。

5.3. 反使役の意味から受身の意味へ

続いて、再帰構文における反使役から受身への意味拡張を見ていこう。スペイン語では、SE は接語化し

ており、（定形）動詞がT主要部に主要部移動する際に動詞と共にTにまで移動すると考えられるため、SEは反使役と同様にVoice主要部を占める。しかし、受身を表す再帰構文におけるSEは＜動作主（Agent）＞を担う要素であると考える。さらにこのVoicePにPass主要部が併合することで、受身の解釈が可能になるとする（cf. Bruening (2013)）。

(30) a. Anticausative: $[_{VoiceP}$ Voice-**SE** $[_{VP}$ V DP$_{<Theme>}]]$
b. Passive: $[_{PassP}$ Pass $[_{VoiceP}$ Voice-**SE**$_{<Agent>}$ $[_{VP}$ V DP$_{<Theme>}]]]$

SEが動作主を担うことができるようになったことで、動作主指向副詞や目的を表す節が認可される。以下、（18）を（31）として再掲する。

(31) El bosque **se** quemó <u>a propósito</u> <u>para construir chalets</u>.
the forest SE burn-Past-3rd-Sing. on purpose to construct houses
'The forest was burned on purpose to construct houses'
（de Miguel (2015)）

ドイツ語は以下の理由でこの段階に至ることができていないと言える。まず、ドイツ語のSEにあたるsichが使われる構文は、反使役文においても助動詞の選択にhaben（have）を用いる。これは典型的には他動詞（と非能格動詞）に用いられる助動詞である。

(32) Das Tör hat/*ist sich geöffnet.
the gate have/*be SE opened.

ここから、ドイツ語のsichは、独自に意味役割をもらわない虚辞的な要素でありながら、再帰構文から拡張した用法においても、いまだ独立性を保持した要素であると考えられる。したがって、ロマンス諸語のようにSEは接語化しないことから、Spec, VoicePはsichにより占められていることで、新たな動作主を担う要素が導入されることはない。したがって、ドイツ語の再帰構文は受身の意味へ拡張せず、反使役の意味までで変化が止まっている。

5.4.　受身の意味から非人称の意味へ

最後に、受身から非人称の意味への意味拡張を統語的に説明する[2]。受身の意味を表す再帰構文では、Spec, VoicePのスロットが空いている。したがって、非人称の意味に拡張する際にはこの位置に*pro*が生起できるようになると考える。以下（34）に受身から非人称への統語構造の変化を示す。

(33) a. Passive: $[_{PassP}$ Pass $[_{VoiceP}$ Voice-**SE**$_{<Agent>}$ $[_{VP}$ V DP$_{<Theme>}]]]$
b. Impersonal: $[_{VoiceP}$ *pro* Voice-**SE** $[_{VP}$ V DP$]]$

3.5. 節でも見たように、Holmberg（2005，2010）は、各言語で非人称の意味をSEが表し得るかどうかについて空主語パラメター（Null Subject Parameter）の観点から記述を試みている。空主語言語ではない英語やフランス語のような言語では、それぞれoneやonのような顕在的な総称代名詞を使って非人称の

[2] 5.4. 節に関して特に、前田雅子先生より示唆に富む助言をいただいた。

意味を表す。対して、空主語言語であるスペイン語やイタリア語などの言語では顕在的な形態素であるSEを用いて非人称の意味を表す。これらの記述は次のように説明される。(33b) では、開いていたスロット (Spec, VoiceP) に *pro* が生起している。したがって、*pro* の生起を許す空主語言語であるスペイン語やイタリア語のような言語では、非人称の意味にまで再帰構文の意味拡張が進むことが許される。それに対し、*pro* の生起を許さない、空主語言語ではないフランス語のような言語では、非人称の意味にまで意味拡張せず、再帰構文は受身の意味までを表すことになる。

5.5.　再帰から非人称までの意味変化のまとめ

以上5.1. 節から5.4. 節まで、再帰構文が持つ再帰の意味から非人称の意味までの統語構造を提案した。以下（34）にその構造変化を改めて示す。

(34) a. Reflexive: $[_{\text{VoiceP}}\ \text{DP}_{<\text{Agent}>}\ \text{Voice}\ [_{\text{VP}}\ \text{V}\ \textbf{SE}_{<\text{Patient/Theme}>}]]$
b. Inherent: $[_{\text{VoiceP}}\ \text{DP}_{<\text{Agent}>}\ \text{Voice}\ [_{\text{VP}}\ \text{V-}\textbf{SE}]]$
c. Anticausative: $[_{\text{VoiceP}}\ \text{Voice-}\textbf{SE}\ [_{\text{VP}}\ \text{V DP}_{<\text{Theme}>}]]$
d. Passive: $[_{\text{PassP}}\ \text{Pass}\ [_{\text{VoiceP}}\ \text{Voice-}\textbf{SE}_{<\text{Agent}>}\ [_{\text{VP}}\ \text{V DP}_{<\text{Theme}>}]]]$
e. Impersonal: $[_{\text{VoiceP}}\ \textit{pro}\ \text{Voice-}\textbf{SE}\ [_{\text{VP}}\ \text{V DP}]]$

また、再帰の意味から非人称の意味までの再帰構文における再帰形 SE の機能を以下に示す。

(35)

再帰構文の意味	代名詞の文法化	具体的機能
再帰（reflexive）	強代名詞	照応形・束縛代名詞・θ役割あり
固有（inherent）	弱代名詞	動詞に編入
反使役（anticausative）	弱代名詞	虚辞・θ役割なし・動作主抑制
受身（passive）	接語・接辞	動作主のθ役割を担う機能的な要素
非人称（impersonal）	接語・接辞	虚辞・θ役割なし

6. Conclusion

本研究では、ヨーロッパ言語における Voice syncretism と呼ばれる現象に注目しその言語間変異と意味変化に統語的な説明を与えることを試みた。ヨーロッパ諸語における再帰構文は、ヴォイスにかかわる意味として、(典型的) 再帰、固有、反使役、受身、非人称の意味をもち、この順に変化が進んできたことが多くの研究で明らかになっている。また、再帰代名詞自体に関しても、文法化によって強代名詞から接語・接辞にまで変化が進み、これに連動して再帰構文の表す意味変化も進んでいる。本稿ではこれらの意味変化を統語上で説明することを試みた。また、各言語における再帰構文の表す意味範囲の言語間変異にも、統語上での説明を与えられるよう提案をした。

尚、以上の理論的な説明をさらに動機づけるためには、歴史的な変化をみながら各言語における言語データを集め、それらを説明することが必要である。それについては今後の研究課題としたい。

参照文献

Alexiadou et al. (2006) The properties of anticausative crosslinguistically. In Mara Frascarelli (ed.) *Phases of Interpretation*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Alexiadou et al. (2015) *External Argument and Transitivity Alternation.* Oxford University Press.

Bergeton, Uffe (2004) The independence of binding and intensification. PhD dissertation, University of Southern California.

Bresnan, Joan. (1998) The emergence of the unmarked pronoun. Ms, Stanford University.

Bruening, Benjamin (2013) By Phrases in Passives and Nominals. *Syntax* 16. pp. 1-41.

Dobrovie-Sorin, Carmen. 1998. Impersonal Se Constructions in Romance and the Passivization of unergatives. *Linguistic Inquiry* 29: 399-437.

Embick, David (2015) *The Morpheme: A Theoretical Introduction*. Mouton de Gruyter.

Embick, David and Alec Marantz (2008) Architecture and Blocking. *Linguistic Inquiry* 39 (1). pp. 1-53.

Fagan, Sarah M. B. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions: A Study with Special Reference to German*. Cambridge University Press.

Geniušienė, Emma. (1987) *The typology of reflexives*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Haider, Hubert (2010) *The Syntax of German.* Cambridge University Press.

Haider, Hubert and Inger Rosengren (2003) Scrambling: Non-triggered chain formation in OV languages. In *Journal of Germanic Linguistics* 15, pp. 203-267.

Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: Bernard Comrie and Maria Polinsky (eds.), *Causatives and Transitivity.* 87-120. Amsterdam: John Benjamins.

Haspelmath, Martin (2003) The geometry of grammatical meaning: semantic maps and cross-linguistic comparison. In Tomasello, Michael (ed.) *The New Psychology of Language.* Vol. 2: pp.211-242.

Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle Voice.* (Typological Studies in Language 23). Amsterdam: John Benjamins.

König, Ekkehard and Peter Siemund (2000) Intensifiers and reflexives: A typological perspectives. In Zygmunt and Curl (eds.) *Reflexives: Forms and functions.* Pp.41-74. Amsterdam: John Benjamins.

Holmberg, Anders (2005) Is there a little pro? Evidence from Finnish. *Linguistic Inquiry* 36 (4). Pp. 533-564.

Holmberg, Anders (2010) The null generic subject pronoun in Finnish: a case of incorporation in T. In Biberauer, Holmberg, Roberts, and Sheehan (eds.) *Parametric Variation: Null subjects in minimalist theory*. pp. 200-230. Cambridge: Cambridge University Press.

Labelle, Marie and Edit Doron (2010) Anticausative derivations (and other valency alternations) in French. In *Probus* 22. Pp. 303-316.

López, Cristina (2002) Las construcciones con se: Estado de la cuestión. In López, C. (2002) *Las Construcciones con se*. pp. 13-163. Madrid: Visor Libros.

MacDonald, Jonathan and Maddox, Matthew (2017) Passive se in Romanian and Spanish: A Subject Cycle. Published Online by Cambridge University Press. pp. 389-427.

Mendikoetxea, Amaya (2008) Clitic impersonal constructions in Romance: syntactic features and semantic interpretation. In Anna Siewierksa (ed.) *Impersonal constructions in grammatical theory*. pp. 290-336.

de Miguel, Elena (2015)「再帰文と完了の se」In 高垣敏博（監修）『スペイン語学概論』くろしお出版 .

Monge, Félix (2002) Las frases pronominales de sentido impersonal en español. In López, C. (ed.) *Las Construcciones con se*. pp. 341-391.

大矢俊明 (2008)『ドイツ語再帰構文の対象言語学的研究』ひつじ書房 . 東京 .

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Languages.* Longman.

Reinhart, Tanya, and Tal Siloni (2005) The Lexicon-Syntax parameter: Reflexivization and other arity operations. *Linguistic Inquiry* 36: 389-436.

Sabb, Andrés (2020) Deconstructing Voice. The syntax and semantics of u-syncretism in Spanish. *Glossa: a journal of general linguistics* 5(1): 127. pp.1–50.

Samo, Giuseppe (2018) A Criterial Approach to the Cartography of V2. Amsterdam: John Benjamins.

Schäfer, Florian (2008) *The Syntax of (Anti-) Causatives: External Arguments in Change-of state Contexts.* Amsterdam: John Benjamins.

Schäfer, Florian (2017) Romance and Greek medio-passives and the typology of Voice. In d'Alessandro, Franco, and Gallego (eds.) *The Verbal Domain.* Oxford University Press.

de Schepper, C. W. M. (2007) Reflecting the past: The development of SE across languages. *Linguistics in the Netherlands* 24 (1), pp. 211-222.

志波彩子（2020）スペイン語の se 中動態（再帰構文）における可能の意味．名古屋大学人文学研究論集　第 3 号：pp.175-195.

Siemund, Peter (2010) Grammaticalization, lexicalization and intensification. English itself as a marker of middle situation types. *Linguistics* 48 (4). pp. 797-836.

Siemund, Peter (2014) The emergence of English reflexive verbs: an analysis based on the Oxford University Dictionary. In *English Language and Linguistics* 18 (1). pp. 49-73.

Steinbach, Markus (2002) *Middle Voice: A Comparative Study in the Syntax-semantics Interface of German.* Amsterdam: John Benjamins.